

やまぐち自然派宣言

共生の思想を深める⑤ 庫本 正

会長あいさつ 白井 啓二



表彰受賞者活動紹介

山口きらめき財団理事長表彰

あなたとNAGATOを結び隊

山口県環境保全活動功労者

高辻 一男

山口県環境学習功労者

笹尾 克之

山口県教育功労者

錦川流域ネット交流会

共生



会員だより

山口県のカブトガニ(二)

原田 直宏

白砂青松を蘇らせ

戸坂 隆男

身近な動物の暮らしをみつめる現場報告

ニホンアナグマの巣穴の中はどうなっているの？

田中 浩

小野湖清掃作業

福場 達朗

天女の舞う風景

吉川 洋

くアサギマダラの不思議

表彰・お知らせ

カマキリ雑話



やまぐち自然共生ネットワーク

平成30年3月10日

共生の思想を深める⑤

共生の意味を探り、実行する

庫本 正

縄文時代には、日本では太陽や月、サクラ、クマ、ヘビなど、自然物に神が宿るという考え方があった。

仏教が入ってくると、人は自然と共生（ともいき）すること、つまり自然と一体になり、自然に従順で豊かな日々を送った。

現代の生物学では、種間関係で「共生」という概念がある。生物学の進歩で、「共生」の実態が解明されると、「共生」は生物進化でも大きな役割を果たした。例えばバクテリアのような原核細胞が真核細胞への進化の過程で、「共生」が大きく関与していた。

私たちが実施している社会での「共生」はただ自然と人が共存するだけでなく、人は自然を大事に保全し、人も自然からたくさんのご恩を学び、豊かな文化を創造することで、豊かな暮らしを開くべきと考えられている。

とはいっても、人が創出する科学技術は圧倒的な力で世界を動かし、人の暮らしを変えている。

そこで、現代の知識人は、自然に害を与えるものは一切使わないこと、また自然を心から尊敬しながら、自然と共生すべきと主張している。しかし、人々の暮らしはドンドン自然から離れていることが気にかかる。

私たちの「やまぐち自然共生ネットワーク」でも、これまで十数年間、懸命に共生によって山口の自然を再生し、県民の住む山口県の環境を向上することに努めてきた。

他県の活動を調べると、兵庫県ではたくさん活動団体が共同で「共生ひろば」を実施している。四百人が入るホールで、老人から小学生まであらゆる年齢層の人々が集まり、共生に関する研究活動を発表し合っている。朝から夕方まで真剣に議論をしているという（岩槻、2012）。素晴らしい活動だ。

私たちの会でも、マンネリにならないよう、新しい共生活動を一步一步進めてゆかなければならないと思う。

参考文献 岩槻邦男著『生命のつながりをたずねる旅』（ミネルヴァ書房）

笑い話

カマキリ爺さん

子供の頃、カマキリ好きの友達がいいた。カマキリがいると、飼育観察に夢中だった。大人たちは「この子、顔がカマキリに似てきたよ。」といって笑っていた。

最近私もカマキリがいたら、夢中で観察するようになった。鏡を見て、「カマキリ爺さん」が気になりだした。



会長あいさつ

白井 啓二

(錦川流域ネット交流会)

全国河川交流会を主催して

みなさん、新年あけましておめでとうございます。昨年の十一月十一日から二日間に行われた岩国市錦町で河川交流会が行われました。平成十二年に山口県でさらに博が開催されましたが、時を同じくして福島県では、うつくしま博が開催されました。戊辰戦争から紆余曲折あったようですが、これを機に交流を持つというところで、河川交流会が行われました。最初に山口県が福島県に行き、交流会を行い、続いて福島県から山口県に連れられ交流会が発足しました。次の年、戊辰戦争にかかわりのある新潟県も参加し、三県交流会となりました。次の年は、愛知県・三重県・岐阜県も加わり、六県交流会となりました。さらに高知県・鹿児島県・福岡県が加わり、九県交流会、更には島根県・宮城県・岩手県・東京都も加わり、全国河川交流会となりました。昨年で第十七回を数えました。開催地は、福島県が五回、山口県が五回、新潟県が三回、三重・岐阜・愛知県合同が三回、福岡県が一回です。今回は錦町での三回目の引き

受けとなり、大会会長を務めさせていただきました。実行委員会の皆さんには大変お世話になりました。全国からのお客様に満足していただくためスタッフは三ヶ月前から準備に取り掛かりました。初日は、錦パレスホテルで交流会が行われました。基調講演として岩国市教育委員会文化財保護課の林班長から「名勝錦帯橋を世界文化遺産登録に向けて」、高川学園中学校高等学校の村田先生から「錦川支流宇佐川に生息・繁殖する国の特別天然記念物オオサンショウウオの調査活動」について講演をしていただきました。その後、各地からの報告を8人の方にしていただきました。大変興味深い話ばかりでした。交流会終了後、懇親会が行われ、錦川流域の美味しいお酒と料理で満足していただきました。余興として地元「錦よさこい連蜩」の演舞と「にしきオールスターズ」のものまね歌謡ショーがあり爆笑をいただきました。二日目は、とこととトレインに乗っていただき、オオサンショウウオの保護施設の見学、平瀬ダム建設工事の視察をしました。山口県ではおそらく最後の大型新設ダムになるようですが全国からのお越しの皆さんもその大きさに驚いていました。その後、錦川鉄道キハ40の特別列車を貸し切り、錦町から西岩国駅まで美味しい弁当を食べながらの清流錦川を堪能しまし

た。錦帯橋を渡り、徴古館、鶴の保護施設、白蛇の館を見学し、ロープウェイで岩国城にも行きました。村岡知事にお越しいただき、ご挨拶をいただき、記念撮影をしました。あつという間の二日間でしたが、全国からお越しいただいた皆さんに喜んでいただきました。今年は島根県益田市の高津川で開催される予定です。お隣の県ですので、多くの皆さんに参加していただきたいと思っております。今後この全国河川交流会が継続し、皆さんが美しい川を守って行くことを切にお願いしたいと思っております。



表彰受賞者活動紹介

山口きらめき財団理事長表彰

あなたとNAGATOを結び隊

隊長 久保田 啓子

この度、山口きらめき財団理事長表彰をいただき、隊員一同大変嬉しく思っております。私たちは、平成二十二年五月に長門の魅力

を再発見し、人や地域を繋ぐことでまちづくりに貢献したいという想いから、この隊を立ち上げました。

活動としては、旧街道「赤間関街道北道筋」の掘り起こしや、

長門の自然・歴史を身近に感じながら、新たな魅力を発見していただくウォーキングイベントを年二〜三回開催しています。また、自治会やコンベンション協会から依頼を受けてコースを一緒に考え、ガイドをさせていただくこともあります。その中で、旧街道の崩れた場所の修復や倒木の片づけなどの整備や子



どもたちと森の中で自然学習会を行い、一緒に散策ルートを考え、手づくり看板の設置も行ってきました。この時の子ども達のキラキラした目は忘れられません。今でも、私たちのウォーキングイベントに、中高校生になっても参加をしてくれます。また、参加者がお友達にも声をかけ、市外県外からもご参加をいただけるようになり輪も広がりました。

昨年二月に開催した油谷島一周ウォークは、ロコミだけであつという間に四十二名が集まり、俵島の柱状節理や百姓庵の海水を使った塩作りを見学したり、地域の史跡や伝説などにも触れたりしながらの一日になりました。

また、平成二十二年度にあなたとNAGATOを結び隊が事務局として、地域で活動されている団体に協力をいただき、“ながと大内湯けむり街道協議会”を立ち上げ、湯本温泉



泉く俵山温泉エリアで「夢街道ルネサンス」の認定を受けました。このエリアでも、毎年紅葉の時期に、旧街道や史跡めぐりをテーマにしたウォーキングを開催しています。昨年



の十一月には、現在建設中の長門俵山道路が、旧街道にも少し掛かるのとことで、現場見学会も兼ねたウォーキングを行いました。国交省や建設業者のご協力をいただき、普段見るこ

とのできない現場の様子を見せていただきました。地域住民念願の道路が、過去、現在の道と上手く調和しているこのコースは、旧街道の整備をしながら、毎年皆さんに歩いていただく予定です。

そして、道は歴史も人の生活も繋げています。今、道を通じて萩市や下関市の団体とも繋がっています。それによって各地の歴史や文化も学びながら、地域の方との交流も出来るようになってきました。一つ一つの積み重ねが少しずつネットワークを広げてきました。人の繋がりが地域を繋げ、歩くことで改めて自然の素晴らしさに気付き、守っていこうという気持ちが生まれると感じています。

今後も、地道にコツコツ。そして自分たちも楽しみながら「結んで」いきたいと思っています。そのためにも今回の受賞は、大きな励みになりました。ありがとうございました。

山口県環境保全活動功労者

高辻 一男
(岩国市錦町)

毎年、四月中旬になると、今年のカタクリの開花はどうかと寂地山を訪れています。平成十九年に「やまぐち自然共生ネットワーク」での呼びかけで取り組まれた「寂地山カタクリ自生地の保全活動」の行動を契機に、山口県自然観察指導員協議会のメンバーの皆様と始めたカタクリ自生地の保全活動も十年目を迎えました。



この活動を始める以前は、自生地一帯の歩道沿いにはクマザサが生い茂っており、自生地に立ち入ってカメラで撮影したり、昼食をしたりする光景がよく見受けられ、存続が危惧されていました。

今では、この保全活動が定着し、入山される皆さんがマナーを守って楽しく鑑賞される姿を拝見することが多く、取り組みの成果が表れております。

このたび、宇佐川流域の自然環境保全の活動が評価され、環境保全活動功労者表彰を授与されたことは、大変光栄なことであり、今後の取り組みにも大きな励みとなりました。これからも健康に留意しながら、自然観察指

導員協議会の方々と連携しながら、カタクリやシヤクヤク自生地の保全、歩道の手入れ等を継続して行っていききたいと思っております。



山口県環境学習功労者

笹尾 克之
(山陽小野田市)

この度、山口県環境学習功労者として県知事賞をいただきました。

私の受賞は、昭和五十一年日本野鳥の会会員、昭和六十二年日本自然保護協議会会員・自然観察指導員として、長年、小学校等いろいろな所で、野鳥観察、自然観察等の指導がこの度の環境学習功労者として知事賞の受賞となったものと思いますが、今日まで多くの方々に、ご指導、ご協力をいただいたお陰だと感謝しております。



指導は、美祢市城原小学校が一番多く平成十年から十八回行いました。学校周辺、山口市、江汐公園等での観察会です。子供たちの質問を始めは観察しながら受けていましたが、そのうち学校から事前に「鳥によって、どうして黄色や青色、緑色と色がついているのか。」「スズメはどれくらいの距離を飛ぶ

のか。」「スズメはなぜ冬の間、身体をふくらませるのか。」「なぜ、セグロセキレイは尾を上下にふるのか。」「弱い対戦相手を『カモ』というのは、鳥のカモと関係がありますか。」等の質問が来るようになり、私の方が勉強になりました。

美祢市は、愛鳥教育に取り組んでおり、東厚小学校に四回、田代小学校に二回、豊田前小学校に四回行き、学校周辺で観察しました。赤郷小学校には十二回行き、八幡池や秋吉台、美東大滝、二反田のカキツバタ、長登等で自然観察指導を行いました。

その次によく行ったのは、岩国市立宇佐川小学校が十五回です。ヤマセミ、オオルリやモリアオガエルの卵塊を見ることができ、また宇佐川のカジカカエルが鳴く時期や、雪が降る中での観察会では、地元の方も参加され、アカシヨウビン等の情報を聞くことができました。

また、山口市徳地森の案内人レベルアップ講座で鳥の巣箱を作製し、巣箱を、雪が積もっている大原湖愛鳥林の木に掛け指導したこともありました。

周南市立八代小学校では、午前はナベツル等のバードウォッチング、午後は学校周辺の植物を利用したクリスマスリース作り等を平成二十年から五回行いました。



下関市立蓋井小学校には、平成二十年から七回行きました。始めは、児童一名と先生、保護者、地元の人で、一人児童が卒業すると学校に児童

がいなくなるということでしたが今は六名になっています。午前は山で午後は海岸で観察会を行い、カラスバトや海辺の鳥等を観察することができました。

山口県緑の少年隊交歓大会等に十五回参加し、観察会やクラフト作りの指導を行いました。

身近なフィールドでは、江汐公園、有帆小学校、高泊小学校、松原分校、竜王中学校、赤崎公民館、高泊公民館、須恵公民館、さら交流館、竜王山オートキャンプ場、社会教育課、社会福祉協議会、中電新小野田発電所等でバードウォッチングや自然観察会、講習会を行いました。

これからも微力ながら身近なフィールドでの環境学習に関わっていききたいと思えます。

山口県教育功労者

錦川流域ネット交流会

代表世話人 白井 啓二

このたび、山口県教育委員会より、教育委員会表彰をいただきました。身に余る光栄でございます。錦川を日本一きれいな川にするため、流域のみなさんと連携を取りながら活動が続けてきました。錦川流域ネット交流会で、平成二十年十月に、山口県知事より県民活動パワーアップ賞、平成二十四年六月に、環境大臣表彰を、翌年の平成二十五年二月には、地域づくり総務大臣表彰を受賞されました。錦川流域のみなさんが、錦川の環境保全や、地域づくりに尽力されたことがこの表彰に繋がったのだと思います。私の錦川の環境保全のきっかけとなったのは、平成十一年五月に本屋で「結の心」という一冊の本と出会ってからです。一晩で読み終え、あくる日には、その本の著者である、宮崎県綾町の助役三期、町長を六期、町づくりに三十六年務められた、郷田實先生に電話をしました。どうしてもお会いしたかったので、その週末には郷田先生の住む綾町に行きお話を聞きました。その話に感銘を受けて、帰ってすぐに活動が始まりました。それからしばらくして、郷田先生に錦町にお越しいただき、町民二百

人の前で「町づくり」の講演をしていただきました。あくる日、お帰りになるときに「まちがいなく錦川は日本一きれいな川です。でも、ほっておいたらすぐに汚い川になります。あなたがた、若い人たちが、汗を流し、楽しみながら守っていただくさい」そう言い残してお帰りになりました。その一カ月後に、八十一歳でしたが、お亡くなりになりました。あの言葉が遺言だったのかもしれない。当時、商工会青年部長を務めていたので、「錦川清流委員会」を立ち上げ、錦川の河川清掃が始まりました。その後、錦川の環境保全のグループが結集し「錦川流域ネット交流会」を立ち上げ、流域全体の環境保全が始まりました。郷田實先生のおかげで、錦川流域の多くのみなさんのおかげで今回の表彰を受けることができました。その後、節分草の保護活動の会の立ち上げ、錦川オオサンショウウオの会の立ち上げなどに繋がっていきました。本当にありがとうございます。また、全国河川交流会、自然塾全国大会などで、多くの友人が出来、全国のみなさんと情報交換を行っています。昨年十一月には、全国河川愛護団体交流会が岩国市錦町で開催されました。全国から来られた皆さんも錦川の美しさに感動されていました。私たちは今後も錦川の環境保全を行い

ながら、子供たちと楽しみながら錦川の素晴らしさを教えていこうと思います。また、錦川流域自然ミュージアム構想の一環として、「錦川淡水魚水族館」建設に向けて、錦川フアンクラブ設立に向けて取り組んでいます。「身はたとい 錦の川に 朽ちぬとも 留め置かまし 川守魂」



会員だより

山口県のカブトガニ(二)

山口カブトガニ研究懇話会

代表 原田 直宏

ここ数年の状況の一部をお知らせします。

カブトガニの産

卵期は六月中旬から八月上旬です。

潮位が高くなる時

期(満月と新月の

ころ)の満潮時(一

日に二回)に、産

卵場である砂場に

つがいやって来

ます。雌の後ろに

雄がくつついた格好です。

私が下関市の千鳥

浜のある砂浜で産卵に来るつがい数を調べ始

めてもう二十数年が過ぎました。ここは、王

喜海岸と勝手に言っていますが、白崎海岸の

方がよかったですかもしれません。その間の変化

はグラフのとおりです。十年以上も少ないま

まだつがいの数が、十二年に急増し、さら

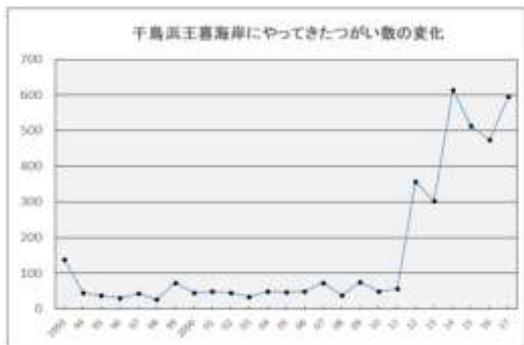
に増えています。一昨年には、千鳥浜の南約

二十キロの北九州市曾根干潟の砂浜に五百を

超える死体が打ち上げられたと報道されまし



た(原因は不明です)。ただ、山口県側で多数の死体が上がったことはありません。周防



体数の変化のようすやその原因はなかなかつかめません。

海岸で調査を

していると思

いがけないこ

もありませ

年六月下旬前

の産卵調査中

に、ガヤガヤと

賑やかな声

してきました。先

生方に引率され



灘西部の個体数は増えているようです。一方、千鳥浜での幼生生息調査でははっきりした変化は出ていません。また、曾根干潟では幼生は減少しています。親になるまで十年近くかかるカブトガニ個



た子ども達が海岸にやって来たのです。四月に講演した王喜小学校の児童達です。この日は珍しく海水に濁りが少なく、すぐ目の前にやって来たつがいを見た子ども達は大変喜んでいました。つがい帰って行くときはかわいい声で送っていました。正に絶好のタイミングで、古里の海で生き続けている貴重な生き物を見る観察会になったものと思います。県内に三カ所残された繁殖地の一つは山口湾です。本州で最も広い千鳥浜ほどではありませんが、産卵する砂場と幼生の生息する砂泥質の干潟が広く分布しています。手つかずだった産卵状況が昨年「カブ研」会員により調査されました。周防大橋東側の約一キロの護岸下の砂場に千

(延べ)以上のつがいやって来ましたが、産卵していることは調査してはいたのですが、数量はわからないままです。貴重な調査です。継続していくと変化がわかってくると思います。幼生の生息については、二〇〇六年から行われている

榎野川河口域・干潟自然再生協議会の調査により記録が積み重ねられています。長浜については、昨年は八月二十日に四〇名ほどで調査しました。暑い中ぬかるむ干潟を一キロほども歩くことは大変です。南潟は九月八日に一〇名ほどで調査しました。十二年間の変化はグラフのとおりです。二〇一一年からは増加傾向です。ただ、山口湾は一九九五年から調査していますが、増えてきているという気



はしません。干潟は常に変化しており、砂泥質とはいえず泥質が強くなったり、また砂質が強くなった



りします。アマモやコアマモ、海藻の分布状況も変化します。当然幼生の生息はその影響を受けます。干潟の把握は難しく、調査を続けていくことはとても必要だと思えます。県東部の平生湾も貴重な繁殖地です。一九九九年にやっと幼生の生息を確認し、既に見つけていた卵塊を合わせ繁殖地であることが確認できました。湾内の干潟は広くなくまた砂場はほとんどありません。かつてはたくさんいたというカブトガニは危機的状況だと思えました。そのような理解のもと、二〇〇二年に山口県が護岸改修に合わせ産卵場を復元、また平生町が

護岸下に新たに産卵場を造成しました。どうにか産卵場が確保され、翌年から産卵が継続しています。以後毎年調査では、卵塊と幼生はある程度維持されています。湾内環境については一時に比べ改善されてきたようです。ただ、



平生町が造成した砂場は一五年が経過し砂が流出し、もう少しで産卵ができなくなると思われます。一方、数年前から漁師さんの網にかかるカブトガニが増えてきたとききます。二〇一五年五月には直接漁師さんからたくさんかかる

よと言われました。昨年は湾内外で六〇〇個体以上もかかり、漁師さんにとって随分迷惑な存在になってしまったようです。絶滅から守るよう活動した結果、増えてきて人間活動に支障を与えるようになってしまった。なんとかしなければと現地での難題に取り組んだ。はじめた漁師さん達も出ています。私は、なかなかいい方法を考えつきません。これからもこの地で安定して繁殖が行われていくという保証はありません。カブトガニが漁師さんと共生することの難しさを実感します。貴重な生物を守ることと人間の活動をどのように調整したらいいのか、大きな課題です。

白砂青松を蘇らせ

山口県樹木医会

会長 戸坂 隆男

私は松林を六年間管理しています。この波雁ヶ浜の松林は、宇部市東岐波の瀬戸内海沿岸に位置する市有林として、面積は約六ヘクタール本数約二千本の松が存在しています。享保年間（一七二六年頃）防風林として植えられた歴史があり、市内に唯一残っている貴重な松林として、永く防風機能と共に、環境教育や森林浴など市民の憩いの場や地域のコミュニティの場として貴重な役割を果たして



います。近年松枯れにより健全な松林が減少していく中、波雁ヶ浜の松林は是非守らなければならぬ場所です。良好な生育環境は、継続的（六年間）な管理、松の重要度ランク付け集中管理、定期的なパトロール観察等を行った結果が実を結んできているようです。

松は痩せ地に生え強く生きる性質があります。以前（六十年位前）の波雁ヶ浜松林は林床が白い砂で覆われていました。松葉を炊き



つけの燃料にする為、住民がスクドサデとして、きれいに掃除してきました。しかし現在の林床は落葉・草等が堆積腐食して富栄養価



の高いものとなりました。軟弱で病害虫に抵抗力のない松林になってきました。

二年前から私たちは強い松林を作ろうと一部千五平米）を実験地として表土を剥ぎ取り定期的な掃除（スクドサデ）を行ってきました。（毎週土・日朝六時から七時過ぎまでボランティアとして作業しています。）そして年に二回東岐波中学校の環境教育として中学生が草取り清掃に汗を流し、そして松くい虫による松枯れの仕組みを勉強してきました。二年たった今の管理地は松と砂が美しく調和し管理することが楽しくなってきました。ボランティアの皆さんも年は取っていますが松

からいただくパワーにより土・日は健康と癒しのひと時となっているようです。皆さんと年二回のカラオケ大会は変装したりご馳走が出たり全員楽しく歌うひと時、松がくれた宝物です。この実験地には百五十年生の銘木・枝葉の変化した稀木等が存在し訪れる人たちが魅了させます。二人で座ると結ばれる『恋人の松』も楽しさを増します。



松露

そして次の目標は松林の魅力のキノコです。赤松林にはマツタケ、黒松林には松露が発生します。いずれも人が入り管理された地に発生し、松露は松露菌より発生し珍味として食されます。波雁ヶ浜の松林も管理されていた時は松露が多く出たと言われます。現在参道沿いのきれいにされた場には稀に松露が出ますが、実験地に松露を発生させようと思いい皆さんと期待しながら掃除をしています。現在まで数個発生しましたが大量とまではいきません。『継続は力なり』微生物(菌根菌・松露菌)の研究・土質の改良等行い健全な松林と松露発生をめざし活動していきたいものです。



枝葉が変化した松

小野湖清掃作業

宇部自然保護協会

福場 達朗

昨年で四十三回目となった小野湖清掃作業は、当協会の主要行事である。昭和四十九年に第一回を開催してから四十四年、ここまでに続けてこられたのも先輩方のご努力の賜物と敬意を表します。八月二十日午前九時、数日前の豪雨で湖面の水位は高く、入り江に溜まったごみの量も近年になく多いため参加者もびっくり。最近では専門学校 학생さんや高校生など若い世代の参加者がおられ頼もしく思われた。作業は、湖面の中に胸まで浸かりごみを集める方、カゴに入れて人力で引き上げる方、(これが一番大変)分別してトラック



に運ぶ方、トラックに移す方と分担して行った。約二時間の作業で流木、落ち葉類を六トトラック一杯と七トトラック三分の二の計六トを地元企業さんに処分していただ



いた。その他不燃物・可燃物十五袋、テレビ二台、タイヤ二個を回収し、市の方で処分していただく。この時期の湖面の水はなま温かく濁っておりヘドロ臭い。作業していても決して気持ちのいいものではないが、これが宇部市や山陽小野田市の水瓶の姿であり、我々の命の水なのです。せめて年一度、その水を視て、触って、臭いを嗅いでいただき感じてもらいたく行ってきた。毎年百名あまりの参加者がここに集まり水の大切さを感じている。

小野湖は宇部市の北部に位置したダム湖である。周囲は豊かな広葉樹林に包まれており、日本でも有数のオシドリ等の飛来地であるほか、絶滅危惧種であるトモエガモの越冬地として全国的にも貴重な場所である。近年、宇部市では生物多様性地域として保全活動を行っている。



当協会は昭和四十六年、宇部市の自然や環境の保護・保全活動を目的に設立された。会員数は現在八十二名、高齢化が進んでいるが会としての若返りが当面の課題である。近年当協会では、ヒヌマイトトンボの代替



え地での生息についても対策している。ヒヌマイトトンボ（絶滅危惧Ⅰ類）は平成七年、厚東川河口で発見されたが、あいにく湾岸道路計画にかかったため代替え地にアシを移植された。ピーク時には二千九百頭の発生が確認されたがその後減少してきている。春と秋に草刈りを行い代替え地の整備を行い保全に努めている。

今後塩分濃度の調整が課題ではあるが他の環境団体と連携して保全していきたいと思っている。



天女の舞う風景

くアサギマダラの不思議く

吉川 洋
(下松市)

今年の十月二十三日、各地に大きな災害をもたらした超大型台風二十一号が茨城県日立市付近を通過しているころ、私の住む山口県下松市は台風一過の涼やかな朝を迎えていました。いつものように、フジバカマの花が咲いている谷間の方を覗いてみると、十々十五頭のチョウがふわふわと飛んでいるのが目に飛び込んできました。



このような暴風の直後でも、何事もなかったかのよう
に宙を舞う
姿は、一瞬、
時空を超え
てきた妖精
か天女を見
ているよう
な気持ちに
させられま
した。
辺り一面
は、数日来
の風雨で木

々の枝葉がちぎれ落ち、台風の威力を物語っているのですが…。このチョウたち、どこに隠れていて、どこから舞い降りてきたのでしょうか!?

前日の嵐から、穏やかな気象を迎えた直後でもあり、浅葱色をした美しいチョウの舞いに、しばらくの間、心を奪われていました。目の前で舞っていたチョウは、アサギマダラという名前を持つタテハチョウ科の一種です。翅の模様は鮮やかなステンドグラスのように美しく、渡り鳥のように日本列島を南北に縦断飛行して、南は台湾や南西諸島方面から、北は北海道まで旅をすることで知られています。

春、列島を北上する個体と、秋に南下する個体はほとんどの場合、旅の途中で世代交代しています。

アサギマダラはチョウの仲間でも唯一、海を渡ることでも知られています。どうやって進路を間違えずに気象を読み、どう花のありかを探して旅ができるのか、不思議がいつぱいつまった生き物です。

そもそも、何の目的で旅をする必要があるのでしょうか。食べていくために、吸蜜植物をさがす移動が必要なことは理解できます。冬の時期を除いて、どこにでも何かの植物が開花しているようにも思いますが…。実は、



アサギマダラは生活環境に気温との関係が密接に絡んでいます。22℃から26℃という気温はアサギマダラが生きていくための安全な温度帯です。人間の感覚でいえ

ば、冬温かく、夏涼しい快適空間を求めて旅する。ということになるでしょうが、暑さと寒さに弱いアサギマダラはこの範囲を外れると生存が危うくなるために、適温を求めて居場所を変えていく必要があるのです。

アサギマダラにはパラティンカ・シーターという学名が付いていますが、このシーターというのは美、幸運、繁栄、豊穰をもたらす仏教の守護神・吉祥天を意味するものだからです。いつの時代に名付けられたかは分かりませんがインドの北西部にあるヒマラヤで発見され、命名されたようです。

日本にいるものはこの一部の亜種で、パラティンカ・シーター・ニホニカと名付けられています。

さて、このチョウが分布しているエリアを



『原色台湾蝶類大図鑑』（白水隆、保育社）

で見ると、西はアフガニスタン東部あたりから、東は日本の北海道まで。南はスマトラ島

から北は中国となっています。これには朝鮮半島も含まれます。

この図をじっと見ていて、ある一つの気付きがありました。この範囲はインドから日本に仏教が伝えられた、その出発点と終点が、ほぼ、一致しているように思えることでした。

唐代の中国の僧、玄奘三蔵が十六年間の修行を終えて、ガンダーラから膨大な量の仏典を命がけで長安に持ち帰ったのは七世紀の中頃のことです。それらが古代インド語から中国語に翻訳されて、さらに日本の奈良の東大寺、興福寺、法隆寺、薬師寺などに伝わってきました。

この時代の百年前後が日本の仏教が広まった時期にあたりますが、玄奘三蔵が翻訳した

お経とともに、吉祥天はこれらのどのお寺にも彫像や画像、乾漆像などの形となってしっかりと収まっています。

このことから、シーターは日本仏教の誕生に、深く関わってきたのではないかと？どんな歴史や背景があったのだろうか？興味を惹かれます。もともとはヒンドウ教の神、ビシュヌ神の妃ラクシュミであったと言われて

います。あらゆる生物にとって、生きていくために必要なものは「食べ物」で、これに不自由しないことが生存のための大前提です。アサギマダラは生まれた時から普通のチョウとは違ったものを食べて、身を守りながら成長していきます。産み付けられる卵は、北上する個体と南下する個体によって場所も食草も異なりますが、どちらの場合も、孵化した幼虫が食べるのは、ガガイモ科の有毒植物と決まっています。ガガイモ科のつる系植物にはアルカロイドと呼ばれる毒性の成分があり、これをチョウウが体内に吸収・蓄積して、外敵から襲われないように防護しているとされています。

蛹になり、さらに脱皮・羽化してからも毒性系植物から毒を取り込むことに専念します。花の蜜が命を支える食べ物になりますが、ヒヨドリバナ属の植物がその多くを占めるよ

うです。秋の七草のひとつ、フジバカマもその仲間です。アサギマダラの好む花にはピロリジン・アルカロイド（PA物質）が多く含まれていて、この物質は雄が成熟する過程で、特に必要な成分とされています。もちろんこれも毒性があります。一生を通して毒のあるものを食べ続けるものは動物界にはそんなにいません。

秋、日本本土を南下するアサギマダラが立ち寄る花として、フジバカマを選ぶのは、この理由によるものです。アサギマダラは旅の途中で子孫を残し、自らはあまり、日にちを置かず寿命を終えますが、秋の南下時にフジバカマから大きな恩恵を受けます。



フジバカマは奈良時代に中国から薬草として入った帰化植物とされていますが、もともと日本にあつたものという説もあります。かつては、観賞用に庭園に植えられ、香草や、

利尿・解熱作用のある薬草として用いられていたようです。元来、人の住む里に生育していたものですが、土地造成や道路・河川の工事によって失われたり、外来植物に駆逐されたりして、著しく減少しました。環境省のレッドデータブックでは準絶滅危惧（NT）種に指定されているそうです。

私は拙宅の庭の片隅に直径五十〜六十センチの株があったことから、これを十本くらいに分けて、すぐ横にある谷状の斜面に植えてみました。平成二十八年の春のことです。すると、新しい土壌に合ったのか、この年の秋には元の株数の十倍くらいの勢力になって、花を咲かせていました。どんな情報をもとにしたかは分かりませんが、アサギマダラが三週間くらいの期間、二〜三頭が入れ替わり立ち替わり、吸蜜のために訪花してきました。



今年は、挿し木等の方法で百株くらいになっていました。その結果、十五〜二十頭の訪花数になりました。普通、移動途中の滞在は二〜三日と言われていますので、延べ百頭前後の個体が訪れてきたので

はないかと思っっています。アサギマダラは警戒心が薄くて、近くに寄っても恐れる様子を見せません。吸蜜中にゆっくりと翅をたたんでいる時は、そっとつかむことができます。気分が良い時かどうかは分かりませんが、頭上近くまで来て、ふわふわ、ひよいひよい、無邪気に戯れて、例えようもない可愛い舞いを見せてくれます。

三週間あまり、次々と飛来していたアサギマダラが急にいなくなつたのは、十一月二日のことでした。その翌日には山口県地方に「木枯らし一号」が吹き荒れて、一足早い冬が訪れたことを気象ニュースが伝えていました。

このとき、アサギマダラは素早いタイミングで、事前に移動していますがどうしてこのチョウは近未来の気象や未知の行き場所、食糧事情等が分かるのでしょうか。

いつも思う疑問ですが、GPSと気象レーダーと心を備えた昆虫が、見えない何者かの指示に従って、自動飛行していくかのように感じます。アサギマダラは『謎の蝶』と呼ばれています。この生態を明らかにすることは当分の間、難しいように思います。

このほど、長野県の高原で標識された個体が、台湾本土を西に越えた離島、ポンフー島で現地の小学五年生の子供たちによって再捕

獲されたという情報が入ってきました。翅にハートマークが描かれていて、捕まえた子供たちは大喜びだったそうです。

今、南の方では、新しい命の誕生が始まる頃です。私たちが来年会えるのは、今年来たチョウたちの一代あとの子孫に当たりますが、記憶をDNAに繋いで、たくさん群れで訪ねてくれればいいと思っています。（平成二十九年十二月）



長野県から台湾まで移動したアサギマダラ

標識：2017.8.28（長野県）

再捕獲：2017.11.15（台湾）

標識：HHI OGU 1451 8.28♡

祝 表彰

*表彰受賞者活動紹介のほか、次のとおり表彰を受けられましたのでご紹介します。

山口県環境保全活動功労者

○西岡 武美 様

(活動内容)

周南市八代盆地に飛来するナベツルの保護を目的に、平成七年にナベツル環境保護協会を立ち上げ、現在に至るまで当協会の会長を務める。近年、ナベツルの飛来数が減少する中、ツル飛来数回復のため、多くのツルが越冬する鹿児島県出水市と交流を行っており、行政



とも連携しながら、出水市から傷病ツルを受け入れ、一定期間保護・飼育した後に八代盆地に放鳥する「ツル



を務める。近年、ナベツルの飛来数が減少する中、ツル飛来数回復のため、多くのツルが越冬する鹿児島県出水市と交流を行っており、行政

移送・放鳥事業」の活動へ大きく貢献。

また、平成十六年には、山口県内で活動する自然保護団体等の情報交換や人材養成を目的とした団体「やまぐち自然共生ネットワーク」の設立に貢献し、現在も顧問として協力を続けている。



お知らせ

*ホームページについて

やまぐち自然共生ネットワークではホームページを作成し、情報を更新しています。お時間があるときに、少し覗いてみてください。会員の皆さまが主催するイベントの情報、会報誌等を掲載しています。イベント情報



H29.11.14 表彰式 (副知事出席)

報があれば、広報担当にお知らせください!

*新規会員募集中!

二月一日現在の会員数は次のとおりとなっています。

* 団体会員 四十一団体

* 個人会員 九十七名

まだ会員になられていないお知り合いの方に声をかけてネットワークの輪を上げませんか。

編集後記

今年、山口ゆめ花博が開催されます。会員の皆さまの中には既に企画に関わっている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。期間中は県内外からたくさんの方が来場されます。是非ご参加いただき、山口県全体で山口ゆめ花博を盛り上げていきましょう。

やまぐち自然共生ネットワークも今年で設立から十三年目です。少しずつでも、このネットワークの輪を上げられるよう自分にできることを一生懸命にやってみようと思います。

このたび執筆いただきました皆さまには心よりお礼を申し上げます。ご意見・ご投稿をお待ちしています。

広報担当 藤本

カマキリ雑話

庫本 正

柳田国男の「蟷螂考」は全国のカマキリの方言が集められ、深い考察がある。子供たちもカマキリの特質を巧みに使った呼び名で呼んだ。カマキリの名前は切れ味の良いい鎌で、他者を切るという意味らしい。

カマキリの方言で一番多いのはオガミだろう。カマキリは交尾の際、雌は雄を食べることがある。オガミは「雄咬み」だという。オガメはオガミの命令形。オガンダラは「拝んだら通そう」という唄言葉。トゥロンビーは漢名の蟷螂かもしれないという。カマキリの古語はイボウジリで、イボをカマキリの前脚で撫でるとイボが消えるという。カマゲツチョウはカマキリ系の呼び名だ。これからカマチコ・カマツキリ・



カマキリへと続くのだろうか。

日頃、カマキリは草の中に潜んで背景に隠れている。イナザルは稻田を渡り歩く猿を連想した呼名だ。野の花にやってきたカマキリは拝み姿でじっと待つ。獲物を待つこと五時間、ミツバチが訪れるや瞬時の刀さばきで、失敗なく捕獲する。こんな観察もあった。ハエトリムシというのは食性の多様性を云っている。農家では田畑の害虫駆除をしてくれるということで喜ばれた。

カマキリはかなわぬ敵に立ち向かう。翅を広げて、驚くべき威嚇姿勢をとる。諺に「小虫の勇志侮るべからず」とある。秋になると産卵をする。その場所にじつと三日間も待ち続けた。産卵場所の良し悪しを判断するのだろう。四日目になって納得したのだろう、産卵を始めた。そういえばカマキリの産卵場所で冬の「雪占い」をする地方があるという。

卵鞘は漢方薬に使われる。涎の出る子に舐めさせると治るといふ俗信が美祢にもある。カマキリは日本に十種類いる。